

2022年10月30日（日）／説教者：國分美生

説教：「問いかけるイエス」

聖書：ルカによる福音書15：1～7

イエスはその時代に「罪びと」や「罪びとの仲間」と呼ばれていた人々に福音を伝えました。それを見てファリサイ人や律法学者たちはぶつぶつ文句を言って陰口を言い合います。同じルカ5章29節以下でも、イエスに召命を受けて従った徴税人レビがイエスのために大きな宴会を開く場面で「なんでお前たちは、徴税人や罪びとたちと一緒に食べたり飲んだりするのか」と非難しています。彼らは律法を守ることに非常に重きを置いている宗教者たちでした。そうするほど神の祝福を豊かにいただけるというのは当時のユダヤ社会の当たり前の常識でした。ですが、彼らにかけていた視点…それは置き去りにされた者たちに対するまなざしです。

当時「罪びと」とはファリサイ人や律法学者たちから、日常の生活の中で律法を忠実に守らない・守れないという理由でもって排除された人々のことを指しました。時代の状況を考えれば、「罪びと」と呼ばれる人のほうが多かったはずですが、徴税人はその仕事内容のゆえに同胞たちから憎まれ「罪びと」と同じように見なされた人たちでした。

しかし、これらの人々はみな、本来イスラエルの信仰共同体の仲間です。この時イエスの目にはっきり映ったのはローマの支配の下で人々がバラバラに分断され、希望や自尊心を失った共同体の姿だったでしょう。

「失われてしまったその1匹が見つかるまでそれを求めて歩いて行かないだろうか？」それは単なる質問ではなく「当然そうでしょうか？」と強い同意を促す問いかけです。そして見つけたら、共同体みんなで喜びを分かち合う様子をイエスは描き出しますが、もともと何か嬉しいことがあったら友人や隣近所の人々を招いて一緒にお祝いの食事をするのは、ユダヤ社会では伝統的に実践されてきた習慣でした。ローマ帝国の支配下で、昔から助け合っていた共同体も、魔訶からも外からも崩されていくような時代状況がありました。しかしだからこそ先の見えない抑圧状況が増す生活の中で、人々の心も荒れて、ばらばらになり、何もかも崩壊させられないように…分断されず連帯を守れるようにという抵抗の思いが、このたとえ話の問いかけの根底にあったのではないのでしょうか。

イエスの問いかけは、共同体の中から失われた状況になる人々がいる時、神の大切な子どもたちとして誰一人も失われたままにならないように、見つけ出すまで探して一緒に喜び合う生き方を再確認させます。（國分美生）